



日本ルイ・アームストロング協会 ワンダフルワールド通信 No.77

日本ルイ・アームストロング協会（ワンダフルワールド・ジャズ・ファウンデーション＝WJF）2013年7月発行
〒279-0011 浦安市美浜 4-7-15 WJF 事務局 Tel.047-351-4464 FAX047-355-1004 Email: saints@js9.so-net.ne.jp

ホームページ <http://members3.jcom.home.ne.jp/wjf/>
発行人 代表・外山喜雄 編集長・山口義憲 編集・小泉良夫

世界一盛り上がった!? 日本の4.30『国際ジャズ・デー』

サッチモを愛するトップ・プレーヤーが外山夫妻を祝福

“日本のジャズ”を本場で披露した原信夫さん、世界の日野皓正さん…

ジャズを愛する人たち、サッチモが大好き、やっぱりデキシーだよなあ、というファン…それよりなにより外山夫妻の人柄にとことん惚れ込んでいるみなさんが、会場を埋め尽くしてくださった。GW 谷間の4月30日(火)、日本ルイ・アームストロング協会の“緊急例会”として開催された「外山喜雄・恵子夫妻の国際戦略大臣表彰記念 4.30ユネスコ国際ジャズ・デー参加コンサート『映像とトークとライブセッション』」(主催:お祝いする会、WJF 後援:アメリカ大使館)、米大使館の文化担当外交官もお見えになって、国際ジャズ・デーを盛り上げる。会場の東京・渋谷の渋谷区文化総合センター大和田「伝承ホール」は、このイベント発表早々に“全320席完売”の素晴らしいイベントとなった。それにしても、世界中でこの会場ほど「国際ジャズ・デー」にふさわしく盛り上がったところがあったのだろうか? サッチモをこよなく愛する日本のトップ・プレーヤーが一堂に会した。1967年、日本人バンドとして始めてニューポート・ジャズ祭に参加し、“日本のジャズ”で本場のファンの度肝を抜いた「シャープス&フラッツ」のリーダー、原信夫さん(86歳!)が来られて“秘話”の数々を披露。コンサートでは、何とあの世界的な名トランペッター、日野皓正さんがサプライズの突然飛び入り! ど迫力の演奏で会場を燃え上がらせた…そんな感動的なWJF“緊急例会”を再録、お届けしましょう。(小泉良夫)



日野さん(写真上中央)も交えて会場を巡ったセカンドライン。中川ヨウさん(下段左の左端)の司会で会場から祝福の喝采を浴びる外山夫妻＝下段左の右。原信夫さん、瀬川昌久さん、中村宏さん…日本のジャズを支える大御所のみなさん＝下段の右、左から

これこそ世界に羽ばたく日本のジャズメンの「国際ジャズ・デー」

現地でも「外山夫妻はまさに「サッチモの大使」なんです！」

アメリカ大使館も全面協力、文化担当の外交官も流暢な日本語でエールを送る

素晴らしい小冊子が直前に到着！ 「アメリカン・ビュー」入場者に配布

午後6時開場、6時半開演。もう5時過ぎから熱心なファンが顔を見せる。WJFスタッフや家族のみなさんまで、プログラムや会報75号、76号、記念品の封筒詰めに精を出す。お祝いの生花、祝電が次々と届けられる。ロビーには、昨年この戦略大臣表彰状を始め、2005年の外務大臣表彰の表彰状や記念品、ニューオリンズの名誉市民証、同市が夫妻の名誉を称えた顕彰のキーなどが展示され、外山夫妻の幅広い活動の足跡が示される(写真下)。

後援していただいたアメリカ大使館作成の外山夫妻を特集した素晴らしい小冊子『AMERICAN VIEW』(特集JAZZ CONNECTION 日本のサッチモが繋いだニューオーリンズと日本の絆)が、作成にあたった広報・文化交流部のスタッフの手で開場寸前にどさっと届けられた。まるで素晴らしいジャズ雑誌みたい=写真左上、6面以降にに詳報掲載。

これも入場者全員に行き渡るようにプログラムともども直前に同封される。すでに大使館のWEBにも掲載され、日本語版もアップされました。

<URLは下記>

<http://amview.japan.usembassy.gov/>

中川ヨウさんの華麗な司会で開幕 中村宏さん「夫妻は日米の架け橋」

さあ、中川ヨウさん(慶應義塾大学特任准教授)の司会で幕が上がる(写真右)。中川さんは、会報76号でもご紹介したジャズの資料館、同大学の『アートセンター油井正一アーカイヴ』の設立にも、大変な貢献をなさっている方で、ジャズの催しには、欠かせないとてもステキなレディ。彼女の紹介で外山夫妻がステージに出



て、この「お祝いする会」代表発起人の1人、中村宏さん(医学博士、ジャズ評論家)が祝辞を述べる。外山夫妻の国家戦略大臣表彰にもあった『『国境を越えた情熱』をもっといに出し、「ジャズの架け橋」にと早くやりたか



米大使館のリチャード・メイさん 「音楽は世界共通の言葉です」

超多忙の中、お祝いに駆けつけてくれたアメリカ大使館の文化交流担当官、リチャード・メイさんは、流暢な日本語で挨拶。「私はニューヨーク生まれで、ルイの自宅があるクイーンズ区の3区ほどのところの出身なんです。小さいときからジャズが好きでした。いま、私も外交官となって、ルイが“サッチモ大使”として世界を回ったことを素晴らしいことだと思っています。音楽は、

ほんとうに“世界共通の言葉”なんですね」と。

外山夫妻とも親交のあるニューオーリンズ市議会議員、ジャクリン・クラークソンさんは常々こう、おっしゃっていました。「外山夫妻は、まさに“サッチモの大使”なんです」。



その“原点”ともなったサッチモの外交官ぶりが、CBSテレビ・ドキュメンタリー番組『サッチモは世界を廻る』(原題=Satchmo the Great)となって、会場に流される。WJFの例

会でも紹介された外山さんのジャズ映像コレクションから

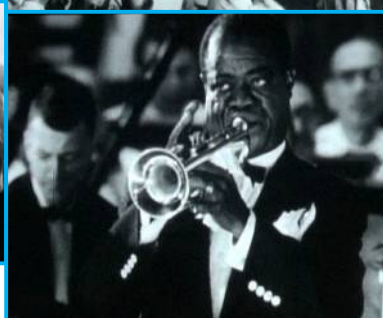


のものだが、今回は、鮮明にデジタル化され、本邦初の日本語の字幕まで付けられた。

『サッチモは世界を廻る』上映 デジタル化し日本語の字幕も

その内容は――。

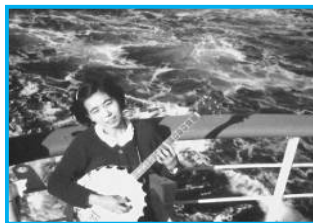
<1956年9月末、ルイ・アームストロングとオールスターズは、スイス、ドイツ、ベルギー、スウェーデン、フランス、イタリア、そして、はじめてのスペインも入れて、10カ国を廻る3か月間のヨーロッパ・ツアーに出発した。ヒコーキの中のルイとバンド。「西暦紀元前218年、ハンニバル（地中海に面した古代国家、カルタゴの将軍）は37頭の象と12,000頭の騎馬を率いてアルプスを越えた。ルイ・アームストロングは20世紀半ば、トランペットを抱え、5人の演奏家を率いて同じアルプスを越えたのである」…CBSの名ニュースキャスター、エドワード・R・マローの壮大な語りのイントロで始まる。『南部の夕暮れ』がバックに流れる。



あのガーナでのサッチモの行動 外山夫妻の活動の原点となる

サッチモはまた、1956年5月、曾祖父母の出生地と信じているガーナにも廻った。空港で盛大な出迎えを受け、当時のエンクルマ首相の前でも演奏する。ガーナでのコンサートには、10万人もの聴衆が押し寄せたという。ガーナの学校でサッチモが子供たちに話しかけ、トランペットをプレゼントするシーン。そう、このシーンこそ夫妻の脳裏に強く焼き付けられ、活動の出発点ともなっているシーンなのだ。

映画の最後は、サッチモのもう一つの夢、ニューヨークのルイゾン・スタジアムで行われた有名なグーゲンハイム・コンサートで、（髪も真っ黒な！）若きレナード・バーンスタインが指揮するニューヨーク・フィルハーモニックの88人とともに、『セント・ルイス・ブルース』を演奏した映像。



2万5千人の聴衆の中には、83歳で盲目となっていたこの曲の作曲者で“ブルースの父”、W・C（ウィリアム・クリストファー）・ハンディの姿があった。演奏を聴き、涙ぐむハンディ…。バーンスタインは聴衆に向かっ

て、こう語りかけた。「私たちが演奏する『セント・ルイス・ブルース』は、彼の演奏をまねてやったものに過ぎません。彼の演奏こそ、真実に満ち、誠実でシンプルなもので、気高ささえあると思います。彼がトランペットを唇に当てた時、たとえ練習のためであっても、そこに魂が打込まれているのです。

彼こそ音楽にすべてを捧げた人物であり、私たちこそ、共演できたことを光栄に思っているのです」>。

まさに「音楽大使」としてのサッチモの姿を追った迫真のドキュメンタリー。前号でもご紹介したが、ジャズが以前にも増して記者たちの目にもとまり、『ニューヨーク・タイムズ』紙は、「アメリカの秘密兵器は、マイナー・キーの中のブルー・ノートである」と書いた。「いまや、その最も効果的な大使はルイ・（サッチモ）・アームストロングである」と。

「今後、全編の完全字幕版も…」 外山夫妻の“原点”、夢は膨らむ

今回のイベントで上映されたのは全62分の一部をカット、38分に短縮したものだが、外山さんは、これを“完全字幕版”として復元し、「今後、ジャズの研究が盛んな大学のジャズ・サークルやビッグバンド、さらには多くの若い方々に映画を見ていただく機会を作って、良き時代のジャズと、サッチモの素晴らしさを知っていただく活動につなげていきたいと思っています」と話している。またの機会をお楽しみに。

その夫妻の日本ルイ・アームストロング協会での“サッチモの大使”ぶりがスライドと映像も交えて紹介される。1967年（昭和42年）12月30日、移民船「ブラジル丸」で米へ。船上でバンジョーを弾く恵子さんに、会場から「かわいい！」の声。長髪の外山さ

ん、黒髪ふさふさ…。サッチモが亡くなった日、ニューオリンズにいた夫妻、サッチモの“ジャズ葬”フィーバー、ニューオリンズの子供たちに楽器を手渡す夫妻、ニューオリンズからお返しの楽器が、東日本大震災の被災地に届けられた日、ニューオリンズからのバンドの来日、被災地のジュニアジャズバンドとの交流…。“サッチモ文化”は果てしなく広がる。来年は、1994年(平成6年)7月の日本ルー・アームストロング協会(WJF)発足から20周年を迎える。発起人の中村宏さんご夫妻とも親交が厚い、ニューヨーク在住のジャズ歌手、ヘレン・メルルさんはじめ、みなさんから

の祝電が披露された。ヘレンさんからの英語の一部を翻訳してご紹介。

<外山さんご夫妻が素晴らしい賞を受賞されたことをとてもうれしく思っています。音楽と世界の子供達を心から愛していらっしゃる外山夫妻とお友だちであることは、本当に素晴らしいことです。できましたら会場に駆けつけて、大臣表彰をお受けになったお二人のステキな笑顔を拝見したいと願っております。でも、またもうすぐまたお会いできますね>(今夏も「サッチモの旅」で夫妻は中村夫妻ともどもニューヨークへ向かいます)

日本のバンドで始めて世界最大の「ニューポート・ジャズ祭」に参加
「シャープス&フラッツ」リーダー、原信夫さんが登板!
これこそ「国際ジャズ・デー」日本のメインイベントとなる歓談

**1ドル=360円の時代の渡米
持ち出しも1人=500ドルまで**

休憩を挟んで、さあ、いよいよ原信夫さんの登場。ステージ左のテーブルに外山夫妻と中川さん、右に原さん、瀬川さん、中村さんが着席して、まさに国際ジャズ・デーにふさわしい歓談が始まる(写真下)。

1967年、日本人バンドとして始めてニューポート・ジャズ祭に参加し、“日本のジャズ”で本場のファンの度肝を抜いた「シャープス&フラッツ」のリーダー、常に日本のジャズ界をリードしてこられた原信夫さん。アメリカから打診があつてこのジャズ祭に参加はすることにはなつたが、すべて自前とのこと。

「当時は1ドル=360円、1人500ドルしか海外に持って行けない時代でした。みんな初めての海外旅行なので、楽しんで貰いたいし…。それを原さんが必死にやりくりして一人でカバーした。6月29日、羽田出発となつて、トラップで記念撮影までして乗り込んだが、予想以上に楽器の荷物が重くてヒコーキ(当時はDC7)が飛べない。楽器を降ろすわけにはいかない。苦肉の策で燃料をその分だけ減らしてしまった。1時間以上も遅れでやっと出発。燃料を

減らした分だけ給油のため途中あちこちに立ち寄る。ウェー

ーキ島、ホノルル、ロサンゼルス…やっとニューヨーク。それからまた、

延々とバス旅行。ニューポートについてしたのは、ぎりぎりのリハーサル前。みなさんかちかちに緊張していたという。

ところで問題は演奏する曲目。アメリカ

では、個性がなければ、まったく認めて貰えない。だから既成のジャズの模倣などは何としても避けたい。そんな秘話を原さんが次々と披露していく。

**『さくらさくら』などすべて日本の曲
“人間国宝”の尺八奏者も加わる!**

1966年からコーネル大学に留学していたという中村さん。「フェスティバルに日本のジャズバンドが来ると言うことで、聞いてみたら、えー!?『シャープス&フラッツ』?」と言うことで、会場に駆けつけた。「確か、演奏された曲の中に『さくらさくら』もありましたねえ」と。

「そうなんです。あの時は日本の曲ばかりやったんですよ」と原さん。そのあたりの事情は、『シャープス&フラッシュ



羽田空港でさあ出発…ところが…(写真左)と、ニューポートでの「シャープス&フラッツ」(同上)

物語～原信夫の歩んだ戦後とジャズ～』(長門竜也著、瀬川昌久監修＝小学館)に詳しいが、『さくらさくら』は前田憲男の渾身の編曲でオープニングを飾った。ほかに『越天楽』『ソーラン節』『箱根馬子唄』、後に人間国宝となった尺八奏者の山本邦山をフィーチャーした『十段(みだれ)』(山本さんは「おお、いいよ、行くよ」と二つ返事で快諾してくれたという。「嬉しかったですねえ」と原さん)、原さん自身の作『古都』も演奏された。聴衆を飲み込み、スタンディング・オーベーションを受けるほどの大成功を収めた。それが、地元はもちろん、日本にも大反響となって伝わった。

もちろん帰国後、直ちに収録され『ニューポートのシャープス・アンド・フラッツ』(日本コロムビア＝YS10013)としてリリースされた。

このニューポートの出演が原さんにとっての初めての海外への演奏旅行だったが、その後、東南アジア6カ国、インド、ソビエト公演…1982年(昭和57年)には、モントルー・ジャズ・フェスティバルにも出演している。それらの思い出の写真が、スライドで会場に流される。まさに「国際ジャズ・デー」にふさわしいトーク・ショーとなり、原さんの独壇場。瀬川さん、中村さんが、話される機会がほとんどありませんでしたね。

この1967年のニューポートへ同行した現デキシーセインツのレギュラーメンバー、鈴木孝二さんがステージに招かれた。「私が4月、シャープス&フラッツに入ったばかりの年なんです。向こうでは右も左も有名な人ばかりでしたよ」と。

世界で活躍している日本のジャズメンが続々と登場
何と！あの日野皓正さんもサプライズ出演
ど迫力の演奏に出演者も会場も大ヒーバー

セインツメンバーも豊富な海外公演
ゲスト出演も錚々たるメンバーが揃う

トークの後は、ライブセッション。まずはホストバンドの外山喜雄とデキシーセインツ。外山喜雄(tp,vo)・恵子(p,bj)こ

の鈴木孝二(cl)、シャープス&フラッツとソビエト公演に同行している粉川忠範(tb)、ニューオリンズの「サッチモ・サマーフェスト」10年連続出演の藤崎羊一(b,tuba)、モンタレージャズ祭ほか海外公演多数のサバオ渡辺(ds)、それにセインツのメンバーとして何度も「サッチモ・サマーフェスト」に参加、シャープス&フラッツのソビエト公演はもとより日本のビッグバンド3つにも参加した広津誠(cl,ts)…改めて紹介することもない、みなさん錚々たるメンバー。

それにゲスト出演の中川喜弘(tp＝デキシー・ディックス)、筒井政明(tp＝デキシー・キングス)、下間哲(tp＝デキシー・ジャイブ)、花岡詠二(cl＝スキッキング・オールスターズ)、藪田勉慶(tb＝デキシー・キングス)…海外出演のベ

テラン、リーダー格の華やかな顔ぶれが出そろ

う。セインツの『明るい表通り』に始まって、全員による『インディアナ』、トランペッター4人の『この素晴らしい世界』、クラリネット3人



まずはセインツ(写真上)、そして、出演者全員(同中段)、さらに、日野さんがサプライズ出演(同左)

の『アバロン』、トロンボーン2人をフィーチャーした『セント・ジェームズ病院』、「国際ジャズ・デー」に寄せて恵子さんのバンジョーをフィーチャーした『世界は日の出をまつている』…そんな中で衝撃サプライズ。

(次ページ下段に続く)



JAZZ CONNECTION

“日本のサッチモ”が結ぶ日本とニューオーリンズの絆 “ジャズはアメリカが世界にくれたステキなプレゼント”

〔在日アメリカ大使館発行マガジン「AMERICAN VIEW」〕

外山喜雄・恵子夫妻の“半生と活動”をたっぷりと特集、同大使館のご厚意でその全文を転載)



東京近郊にある陽気なパブ。金曜日の夜、ここはあらゆる層の人々で溢れかえる。若いカップル、ひとつのテーブルを囲んだ何人もの年齢の女性たち、盛り上がっている若い外国人グループ。幼い息子を連れた母親もいる。店の隅にはステージがあり、今まさに始まろうとしているショーを一目見ようと、店の外にも人々が列を成している。このように、年齢も性別も、国籍さえ千差万別の人たちを引きつけるな



新浦安の英国風パブで演奏する外山喜雄とデキシーセインツ

んて、一体どんなショーが始まるのだろうか。舞台に現れたのは「外山喜雄とデキシーセインツ」。懐かしいニューオーリンズのジャズを奏でるグループだ。彼らの演奏が始まると、その場にいる誰の顔にも笑顔がこぼれる。

「ジャズはアメリカが世界にくれた素敵なプレゼントなんですよ」。アメリカン・ビューのインタビューで外山さんはこう答えた。

ライブでトランペットを吹き、バンドに合わせて歌うとき、彼が考えているのは「ニューオーリンズのスピリットと『サッチモ』（ルイ・アームストロングの愛称）のハートを伝えて、お客さんに喜んでほしい」ということだ。6人のメンバーで構成されるデキシーセインツは、「聖者の行進」のような

(前ページから続く) 日野皓正さん(tp)が突然、予定もなく駆けつけてくれたのです。これには、ステージはもとより会場も大ヒーバー。ド迫力の演奏が続く。『ベイズン・ストリート・ブルース』に続いて、フィナーレの『聖者の行進』では、日野さんも加わって全員会場を回る。この日、助っ人に駆けつけてくれたスタッフで WJF のアイドル、伊藤咲子さん(ts)が、興奮気味に発する。「日野さんってセクシー！」。そう、その言葉につきますね。このフィナーレの前に、この日の発起人の1人、佐藤修さん(元ポニーキャニオン社長、サッチモ・グッズの世



往年の名曲を演奏しながら、お客さんにニューオーリンズ・ジャズについて説明し、手拍子や歌で演奏に参加するよう呼びかける。

ショーの途中で、外山さんと奥さんの恵子さん(バンドでピアノとバンジョーを担当する快活な女性)がお客さんに派手な傘を手渡した。するとバンド・メンバーがステージから降りて、それぞれの楽器を演奏しながら店内を練り歩き、お客さんがその後ろから、踊ったり、傘をクルクル回したりしながら一列になってついていった。外山さんいわく、これは「セカンド・ライン」というニューオーリンズ独特の風習だそうだ。かの地では、お葬式のとき墓地までパレードする。行きは静かな音楽が奏でられるが、死者の埋葬を終えた後の帰り道では、バンドがにぎやかな曲を演奏し、その後から一般の群衆が音楽に合わせて踊ったり、傘を掲げながらパレードするのだ。

(次ページ以降に続く)

「4.30ユネスコ国際ジャズ・デー参加コンサート」の会場でみなさんにお配りした小冊子とWebマガジンのレイアウトと、この会報でのレイアウトは異なりますが、記事そのものはWebと同一です。

界的コレクター)がお礼のご挨拶とひと言(左の写真の左)。「この活動が20年も続いていることは、ひとえに外山夫妻の誠実に真面目なお人柄の賜物…」と、エールを送った後、「今度は若い人を連れてきて欲しい…」。そう、この日も、結構ご年齢の方々が多かったですからね。来年の WJF20周年に向けて、これは、最大の課題なんです。続いて磯野博子さん(ジャズ評論家、故いソノテルヲ氏夫人)から夫妻に花束が贈られた(上の写真の右)。外山夫妻の大臣表彰を祝い、「国際ジャズ・デー」を謳歌する素晴らしいイベントだった。(完)

(全ページからの「アメリカン・ビュー」続き) 外山さんは「日本のサッチモ」と呼ばれている。その理由は、彼が「この素晴らしい世界」(What a Wonderful World)を歌い始めるとすぐにわかった。その重厚な声の響きが、彼の尊敬するジャズの巨星ルイ・アームストロングとそっくりなのだ。

若いころジャズに魅せられた外山夫妻が、ジャズ生誕の地ニューオーリンズに向かったのは1968年のことだった。それから5年間、ふたりはこの町で暮らしてジャズを学んだ。「アメリカに行って、すごく視野が広がりました。世界を見る尺度が違ってくるんですね。特にニューオーリンズはジャズのメッカです。だからヨーロッパからも勉強に来ているし、いろいろな人が来ているんですよ。ジャズのコアの人たちと関係ができてたりする。日本だけにいたら、日本のことしか見えない。ニューオーリンズからヨーロッパにも行きましたが、いろいろな場所を体験してみると、本当に違うものが見えてくる気がしました」

ニューオーリンズでは地元のミュージシャンと一緒に勉強したり、ジャズ界の著名人と友達になったりした。こうしたネットワークと外山夫妻のジャズに対する深い愛情により、ふたりはニューオーリンズと日本の間で、音楽を超えて広がり、人々の人生を変える人間同士のつながりを築くことができた。

日本に帰国後、1990年代にニューオーリンズを再訪した外山夫妻は、町がとても危険な場所に変貌していたことにショックを受けた。あちこちにドラッグが溢れ、実際に銃

を持っている若者がいると知ったふたりは、何とかしなければと思った。そのとき外山さんの頭に浮かんだのがルイ・アームストロングのことだった。アームストロングはスラムで生まれ、若いころピストルを空中に発砲したため少年院に送られた。その少年院で音楽を学び、金管楽器のコレットに熱中したサッチモは、ついにはジャズの世界に革命を起し、史上最も偉大なミュージシャンのひとりに数えられるようになった。



ルイ・アームストロング (1959年) (AP Photo/Werner Kreusch)

サッチモの人生からヒントを得た外山夫妻は、日本

ルイ・アームストロング協会を設立した。この協会は「銃に代えて楽器を」というスローガンの下、ドラッグや暴力に手を染める代わりに音楽を奏でられるよう、ニューオーリンズの子どもたちに楽器を贈ること、そしてサッチモの音楽を楽しむとともにサッチモの精神を多くの人々に知ってもらうことを目的としている。「まず僕たちが一番やりたかったのは、アメリカが世界にくれた偉大なプレゼント『ジャズ』を学んだときにお世話になったアメリカのミュージシャンや

他のアメリカの人たちに恩返しをすることで皆さ



ニューオーリンズのプリザベーション・ホールで演奏する外山喜雄さんと恵子さん(1968年)



ニューオーリンズの若いミュージシャンたちと演奏する外山さん夫妻



1994年に再び訪れたプリザベーション・ホールで、若いミュージシャンたちと演奏する外山さん

ん、本当に心が広い、優しい人が多かったのです」
外山さんたちの活動がメディアに取り上げられるようになると、何年もクローゼットにしまわれたままだった古い

トランペットやサクソホンが日本全国から協会に送られてくるようになった。「本当に、びっくりするようにたくさん送られてきました。皆さん、大切な楽器でしよに、ニューオーリンズに届けてもらえるなら手放してもいいと思ってくれたようでした。送られてきた楽器に添えられた手紙を読んで、私たちも感動しました」と恵子さんは言う。日本ルイ・アームストロング協会が設立から18年間でニューオーリンズの子どもたちに贈った楽器の数は、実に800台近くに上る。



日本通運のご厚意により、楽器は無料でハリケーン・カトリーナの被災者に送られました

2005年にハリケーン・カトリーナがニューオーリンズを襲った直後、外山夫妻は日本人たちからの支援を募るメッセージをインターネット上に掲載した。するとジャズのファンやミュージシャンから、ハリケーンで楽器を失ったミュージシャンや子どもたちに楽器を贈りたいというメッセージが殺到した。「驚くほど多くの人たちが支援の手を差し伸べてくれました。日本ルイ・アームストロング協会に、合計でなんと1000万円の寄付が届いたんです」。外山夫妻はニューオーリンズの団体やミュージシャンとの人脈を利用して多額の寄付金と楽器を送り、ハリケーンの影響を受けたジャズ発祥の地の復興を支援することができた。



日本から贈られた楽器で演奏するニューオーリンズのTBCプラスバンド

そして2011年3月11日。今度は日本が災害に見舞われた。東日本大震災で被害を受けたのは主に東北地方だったが、外山夫妻が住む東京近郊の町は埋立地の上に作られているため、ふたりの家も大きな被害を受けた。しかし彼らに自分たちの状況を心配している暇はほとんどなかった。震災の直後から、日本を助けたいがどうすればいいかというニューオーリンズの人々からの問い合わせの電話やメールが殺到したからだ。

過去に日本ルイ・アームストロング協会から楽器を受け取ったことがあるニューオーリンズの学校のうち1校は、

日本を支援する募金集めのチャリティー・コンサートを開いた。ニューオーリンズのジャズ・ライブハウスで、子ども向けの音楽プログラムの振興や学校への楽器の寄贈も行っているティピティナス財団も、支援を申し出るメールを送ってきた。「カトリーナで同じような壊滅的被害を受ける経験をした私たちには、被災地に楽器を送る必要があることが理解できました」とティピティナス財団のベサニー・ポールソン事務局長は言う。「カトリーナの後、前に進み、ニューオーリンズの再建を続ける意欲を人々に持

たせる光の役割を果たしたのが音楽です。日本の震災の後、ティピティナス財団が日本支援を決めたのは自然なことでした。私たちは、カトリーナの後ニューオーリンズ市民が持ったものと同じ希望と励みを、津波の被災者にも持ってもらいたかったのです」

外山さんは言います。「本当にありがたいことだと思いました。こういうことになるとは思っていませんでした。そのとき被災地はまだ、水もない、食料もない、電気もない、混乱した状態でしたから、楽器どころではないと思いました」。日本ルイ・アームストロング協会がティピティナス

財団に力を貸し、津波で楽器を流されているバンドがないか探した結果、宮城県気仙沼市の「スウィング・ドルフィンズ」と同県多賀城市の多賀城東小学校の「ブライト・キッズ」という2つの子どものバンドが被害に遭っていることがわかった。そしてこの2つのバンドに、ティピティナス財団からの寄付金で購入した新しい楽器を送る手配をした。

楽器をもらった若きミュージシャンの中には、家を失って避難所で生活していた子もいたが、真新しい楽器を使って練習を始めた。そして2011年4月24日、震災後まだ2カ月もたたないうちに、スウィング・ドルフィンズは気仙沼市の避難所の前でコンサートを開いた。その模様が日本全国に放送され、当時の数少ない明るいニュースのひとつになった。「悲しみが満ちている状態の中、

それがすごく温かい話題となりました。良いニュースとなったので、とてもうれしかった」と外山さんは思い起こす。

外山夫妻は長年、ニューオーリンズと日本の若いミュージシャンを対象とするジャズ交流プログラムを企画することを夢見ていた。その夢が一部実現した。2012年10月、日本レイ・アームストロング協会はティピティナス財団、国際交流基金と協力して、ティピティナス・インターン・バンドとオー・ペリー・ウォーカーズ・チョーズン・ワズ・プラスバンド(OPWバンド)の子どもたちをニュー



日本で演奏するニューオーリンズの子どもたち

オーリンズから日本に招いた。「私たちが支援してきた高校生の子どもたちが、まさか日本に来る機会があるなんて思っていませんでした。私たちが(ニューオーリンズに)行ったときに、将来日本に行けたらいいなという夢みたいな話をしていたんです。その子たちが日本に来られることになって、本当に夢が実現しました。子どもたちにとって本当に素晴らしい新しい経験をしたと思います」と外山さんは語った。来日した子どもたちは「横濱ジャズプロムナード」「東京ニューオーリンズ・ジャズ・フェスティバル」(サッチモ祭)のほか、被災地での数々のイベントで演奏した。

ティピティナス財団のプログラム・マネージャー、エミリー・メナード氏はこのように言っている。「日本訪問のハイライトは、私たちが楽器を贈った日本の子どもたちと会い、彼らが大好きな音楽を演奏するのを聴くことでした。実際に会うのは初めてでしたが、どの顔もなじみがあるように見えました。どういうわけか、私たちはつながっており、ずっと昔から彼らのことを知っていたように感じました」



東北を訪れ、ブライト・キッズと一緒に演奏するニューオーリンズのメンバー

かつてブライト・キッズのメンバーだった多賀城市の中学生、千葉隆壺君は、ニューオーリンズの若いミュージシャンと、彼らの先生でもある有名なジャズサクソ奏者のドナルド・ハリソン氏の演奏を見る機会を得て大喜びだった。お母さんの貴久江さんは「隆壺にとって夢のような時間でした。外山さんがいなければ、ドナルド・ハリソンが日本に来ることもなければ、東北学院(隆壺君が通う中学校)に来て息子の真横で演奏してくれることもありませんでした」と語った。

ニューオーリンズから来た若いミュージシャンたちも、日本訪問から深い影響を受けた。東北の被災地を訪れるこ



石巻ジュニアジャズオーケストラの子供たちと

とは、それ自体が感情を揺さぶられる体験だが、特に幼いころハリケーン・カトリナを経験した彼らが被災地で演奏するのは感動的だった。「たとえ言葉で思いを伝えられなくても、私たちが交流しているのは、災害からの復興がどのようなものか、そして音楽にどれほどの力があるかを理

解している人たちだということが、私たちにはわかりました」とティピティナスのポールソン事務局長は言う。「この経験から子どもたちが得た人生の教訓と交流には、計り知れない価値があります」

気仙沼市では、津波で陸に押し上げられた漁船が、津波の破壊力を物語る記念碑として道路沿いに残されている場所も訪れた。「ニューオーリンズのジャズのお葬式のように演奏される賛美歌をみんなで演奏しました。それも彼らにとって思い出深いことだったと思います」と外山さんは語った。OPWバンドの一員として日本に来た高校生デビン・リー君は、日本で大地震が起きたと聞いてどう思ったかという質問に、このように答えた。「すぐにハリケーン・カトリナのことを思い出しました。船やがれきがあちこちにあって…。カトリナのときのことをいろいろ思い出してしまうので、被災地のニュースを見るのがつらいときもありました」



気仙沼市で津波の犠牲者を追悼するニューオーリンズのミュージシャンたち

共に大災害を経験した日本とニューオーリンズは、特別な絆を育んできた。日本を訪れたニューオーリンズの子どもたちは、おそらく皆が、ティピティナス・インターン・バンドのハンター・バーガミー君の説得力のある言葉に同意するだろう。「日本での経験を通じ、僕は文化に対する尊敬の念を学びました。宮城でいろいろ経験して、世界がひとつになって協力し、助け合わなければならぬことがわかりました。そして同じような自然災害にしばしば見舞われるニューオーリンズと日本は、再建と再生を理解しているという点で固く結ばれています」



ではスウィング・ドルフィンズとも共演しました

ポールソン事務局長は、日米の子どもたちが夕食を共にした仙台でのイベントを思い起こす。「それまでは片言

の英語や身振り手振りでコミュニケーションを取っていましたが、しばらくすると誰かがマイケル・ジャクソンの歌を歌い始めたんです。ここでも、言葉で意思の疎通ができないときに、子どもたちを交流させたのは音楽でした」

「今回の文化交流はとりわけ特別なものでした。なぜなら、それまで一度も会ったことがなく、話す言葉さえ違うのに、共通の体験があったので、私たちは言葉の壁を乗り越えて一体になることができたからです」とメナード氏は説明した。

ニューオーリンズからの一行にとって、今回の旅で最も充実感を味わったのは、日本の観客が自分たちの音楽と一体になっていると感じられたときだった。日本の観客は概してアメリカ人よりも遠慮がちだが、ティピティナス・インターン・バンドのダリル・ステイブス君は「僕たちの演奏で日本の

観客はとても盛り上がりました。どのショーでも大勢の人が参加してくれたので、演奏をさらに楽しむことができました」と語った。OPWバンドのデビン・リー君は「お客さんたちの表情を見ると、みんなとても楽しんでくれていることがわかりました。ニューオーリンズの人たちと同じように、僕たちと一緒に踊ったり、セカンド・ラインに参加してくれました」と言う。

今回のジャズ交流プログラムへの参加を通じ、日米どちらの子どもたちも、音楽を通じて、言葉と文化を超越する、人と人との間の深い結び付きが生まれることを学んだ。悲劇を経験した人を元気づける一方で、同じ感情を分かち合うために人々を結び付ける力が音楽にはある。千葉隆壺君のお母さんは、隆壺君がこのプログラムでこうした交流を体験できたことを喜んでいた。「音楽は英語

関係ないんですよ。音、リズム、メロディーは世界共通なので、(英語を)話すことができなくてもわかりますよね。悲しい曲でもうれしい曲でも、聴くだけで悲しい曲なのかうれし

い曲なのかわかる。それを外山さんに教わりました。音楽は『世界共通の言葉』なんです」

今回の「ジャパン・ツアー」に関わった誰もが、忘れられない経験だったと言う。そして外山喜雄さん、恵

子さんにとっては、長年の夢がかなったことになる。ふたりはこのプログラムを通じて、若いころに見つけた「ジャズという贈り物」を使い、大きな災害を経験した若者の心を慰めた。けれどもジャズ交流プログラムは始まったばかりだ。「この夏には、ニューオーリンズからの楽器で復活したスウィング・ドルフィンズをニューオーリンズへ連れて行って、あちらで『ニューオーリンズの皆さん、ありがとうございました』というお礼の気持ちを込めた演奏をさせてあげたいと思います」と外山さんは言う。ティピティナス財団によると、スウィング・ドルフィン

ズは2013年8月にニューオーリンズを訪問する予定であり、現地の中学生バンドとのセッションや、ティピティナスのライブハウス、サッチモ・サマー・フェスティバルでの演奏のほ

か、日本へのツアーに参加した子どもたちとも交流する。



東北・石巻の子どもたちとの演奏



早稲田大学ニューオーリンズジャズクラブと



若き日の外山喜雄さんと恵子さん

一方で外山さんは、ライブ演奏と、ルイ・アームストロングについての本の執筆を通じ、ニューオーリンズの素晴らしい世界を日本に紹介する活動を続けていく。ティピティナス財団もニューオーリンズで若い世代に本物のジャズを教える取り組みを続ける。世界中の若者たちを結び付け、互いに交流し、ジャズや人生について学びあえるようにする重要な役割を担うのが、外山喜雄さん、恵子さんのような人々の草の根の活動であることは、今後も変わらないだろう。(アメリカン・ビュー終わり)

こちらがジャズが結んだ“日米の絆”——ジミー・スミスさんアメリカに還る

Good luck JIMMIE! We'll miss you so much, never forget you, and hope to see you again.

5月31日、六本木で夫妻を囲んでセインツが歓送会

エラ・フィッツジェラルドやライオネル・ハンプトン、エロール・ガーナ、B.B キングら最高のアーティストと共演してきた、ご自身もすでに“伝説のドラマー”とも言えるジミー・スミスさん(75)＝ニュージャージー州ニューアーク出身＝が、長年の日本滞在に終止符を打って去る6月3日、成田を発った。アメリカ



での滞在地はロサンゼルス中心街に近いイングルウッドの自宅。このジミーさんの離日に先立つ5月31日、日本での自宅に近い六本木で、ジミーさんと奥様の和子さんを囲んで、外山夫妻とセインツのみなさんが思い出を語りながら楽しく歓談しました(写真)。



外山恵子さんのあのバンジョーの「原点」に遭遇 テューレーン大学ジャズ資料館で外山夫妻も驚愕の大発見



今年も5月の連休を利用して4/27~5/4の日程でニュー・オリンズを旅してきました。東北の被災地に楽器を寄付してくれたティピティナス財団(Tipitina's Foundation)のチャリティー・イベント「Instruments A Coming」を表敬訪問した前回の旅からちょうど2年ぶりということになります。この季節といえば旬の茹でザリガニ(Boiled Crawfish)に、今や世界的に有名なフェスティバルとなったJazz & Heritage Festivalといろいろ楽しみの多い季節ですが(その分、宿も飛行機もすごく高い!!)、今回は外山さんご夫妻にまつわる貴重な資料(あるいは史料といってもいいかも知れません)を発見したテューレーン大学ジャズ資料館についてレポートしてみたいと思います。

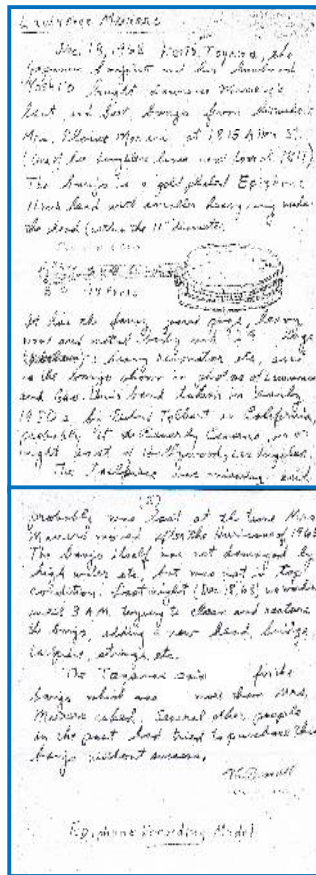
テューレーン大学(Tulane University)はセントチャールズ通り沿い、観光客もよく訪れるお屋敷街(ガーデン・ディストリクト)の少し先、オーデュボン公園の向かいにあります。向かって右隣の赤レンガ造りの大学がロヨラ大学、白い石造りの校舎が美しいキャンパスが目指すテューレーン大学です。ニュー・オリンズ名物の路面電車で行くことができますが、今年は線路下に枕木を敷設する工事中だったので目的地の少し手前で市の交通局が用意した無料バスに乗り換えて大学に到着。「南部のハーバード」とも言われる名門だそうで、ジョン・グリシャムの小説、また後に映画化された「ペリカン白書」にも登場します。

ジャズ資料館は正式にはウィリアム・ランソム・ホーガン・アーカイブ(William Ransom Hogan Archive)といいまして、美しい公園のような大学の中庭を抜けた左側の奥、ハワード・ティルトン記念図書館(Howard Tilton Memorial Library)の別館、ジョセフ・メリック・ジョーンズ・ホール(Joseph Merrick Jones Hall)の3階304号室にあります。中に入ると小さな閲覧室、その右手にアーカイブの責任者と思しき人物の執務室、通路を挟んで向かい側にアーカイブのスタッフの部屋があります。二つの部屋に挟まれた通路が資料保管庫へ続いているようですが、僕たち一般の来訪者は立ち入ることができず、カウンターで必要な資料を請求して閲覧室で閲覧するというスタイルです。ちなみに出てくる資料のほとんどはゼロックス・コピーです。原本が保管されているのか、あるいは資料館が持っている原本そのものがコピーなのかは不明です。依頼すれば実費(?)でコピーを取ってもらうことも可能です。

ラグタイム・ピアノの研究家で、子供のころ父親に連れられて毎月のように通った水道橋スウィングの常連だった大矢儀一さんに勧めて頂いて初めて訪れたのが前回のニュー・オリンズ旅行の時。そのときにも

同地出身のクラリネット奏者、ジョージ・ルイスに関する面白い資料をいろいろと見つけたのですが、これについては次回にでも詳しく紹介させて頂くとして、今回は彼のバンドで活躍していたバンジョー奏者ローレンス・マレロについての資料のお話を。今回の旅の目的のひとつ、それはジョージ・ルイスも眠るマクドノービル墓地にあるというキッド・トーマス・バレンタインのお墓を探し当ててお参りすることでした。彼のお墓についての資料や埋葬記録のようなものが残っていないかとアーカイブを訪れたわけです。そんなわけで今回はジョージ・ルイス関係の資料と一緒にキッド・トーマスのファイルもリクエスト。ふとした思い付きでローレンス・マレロのファイルも閲覧請求してみました。彼がバーガーディー通りに住んでいたことがあるとどこかで読んだ覚えがあって、彼の住んでいた家の住所が分かったら訪れてみようと思ったわけです。それにしてもここを訪れるたびに感心することは、受付の若いお嬢さんがジョージ・ルイス、トーマス・バレンタイン、ローレンス・マレロ、いずれも一発で解ってくれること。さすがジャズ・アーカイブの受付嬢です。

ローレンス・マレロに関する資料は、ジョージやキッド・トーマスに比べると資料の分量も4分の1から5分の1程度、たった1冊の薄いフォルダが全てでした。しかし、こんな薄っぺらなフォルダの中に貴重な文書が眠っていたのです。ぱらぱらと文書に目を通していくと、なんと味のあるバンジョーのイラストをあしらった手書きのメモを発見。世の中、音楽そのもの以上に楽器に興味を惹かれるマニアやコレクターもたくさんいて、そういった類の人がマレロの愛器について書いたものだろうと軽い気持ちで冒頭の数行を読



マレロ夫人から譲り受けた恵子さんのバンジョー全分析

んでびっくり仰天!!そこには、

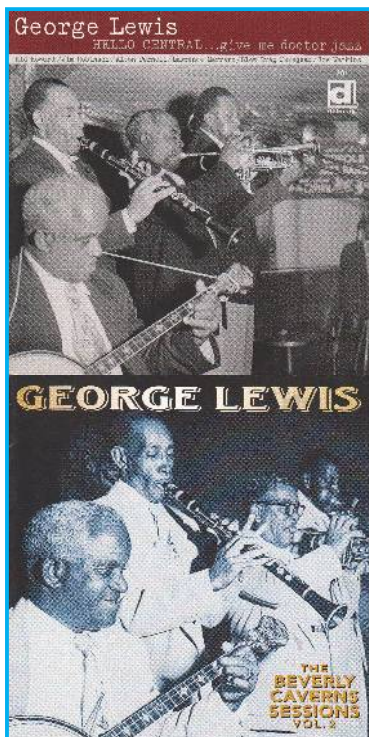
Dec.18, 1968 Keito [Keiko] Toyama, the Japanese banjoist and her husband Yoshio bought Lawrence Marrero's last, and best, banjo from his widow, Mrs.Eloise Marrero (以下略、訂正箇所含め原文のまま=写真は前ページ中央、右下に抄訳)

と書かれているではありませんか!!!この楽器が外山さんご夫妻の元にやってきた経緯を知る者であればここまで読めば十分。このバンジョーにまつわる物語を知っていて、しかもこんなメモまで残した人物はいったい誰だろうというのが次の関心事です。ページをめくってメモの最後に記された執筆者の署名を見てまたびっくり。なんとそこにはWill Russellと書かれているではありませんか!!!

ご存知の通りウィリアム(ビル)・ラッセルは1940年代にジャズのルーツを探るためにニュー・オーリンズに現地調査にやってきたジャズ史の研究者。本業はクラシック音楽の現代作曲家だったそうです。彼はニュー・オーリンズでバンク・ジョンソンやジョージ・ルイスの消息を突き止め、彼らの演奏をレコーディングしたいいわゆるニュー・オーリンズ・リバイバルの影の立役者。アメリカン・ミュージック・レーベルを興して貴重な演奏の数々を後の世に残し、後にニュー・オーリンズに移り住んでニュー・オーリンズ・ジャズの研究に一生を捧げた人物です。そんな彼が、現在外山さんご夫妻がお持ちの楽器が正真正銘ローレンス・マレロの遺品であることをメモに残してくれていたわけです。イラストの傍らには几帳面に楽器の製造番号までメモされていますので個体の特定もバッチリ。このときの詳しい経緯やエピソードなどはすでに外山さんがご著書で詳しく紹介されていますが、メモの最後には外山さんご夫妻が未亡人のオファーよりもはるかに高い金額でこのバンジョーを買い取ったこと、過去に何人もこのバンジョーを譲ってもらおうと未亡人にアタックしたもののいずれも断られていたことなどが書かれています。

この資料を目にしてウィリアム・ラッセルという人の人柄に触れることができたのも今回の貴重な収穫でした。文書1ページ目の中ほど、バンジョーのイラストの下あたりの2-3行でバンジョーの仕様について触れているくだり、彼は「24 lugs (I believe)」と書いた後に、I believeの部分を塗りつぶして消してあります。おそろくろ覚えで「ラグが24本(だったと思う)」と書いた後、現物を確認したか何かで間違いなくラグが24本だったことのウラを取ってからこの部分を塗りつぶして消したのだと思われます。しかもこのメモを書いたのが夜中の3時までかかってバンジョーをレストアした翌日!!貴重な楽器をその故事来歴とともに後世に残そうという彼の使命感のようなものと、学者らしい几帳面で実直な彼の人柄が偲ばれる大変興味深い資料だと思います。

早速その夜、日本時間でユネスコ国際ジャズ・デーのコンサートを終えたばかりであろう外山さんにメールでご報告。旅先でスキャナーが使えなかったので、部屋のベッド



そう、このバンジョーなのです= 外山夫妻提供のジャケット写真から

にコピーを並べてデジタル・カメラで写真を撮ってお送りしました。いってみれば最も権威ある研究者による鑑定書がテューレーン大学の資料館に眠っていて、ふとした偶然から40年以上の歳月を経て現在の楽器の持ち主の元へ届いたわけです。この資料の持つ意味がある程度分かっている、しかも当事者である外山さんご夫妻と親しくさせて頂いている僕の目にたまたま触れたことも偶然にしては出来すぎていて何か運命のようなものを感じずにはいられません。ローレンスと、未亡人、そしてラッセルから外山さんご夫妻への45年目のプレゼント、彼のバンジョーを45年間大切に大切にすばらしい音色で奏で続けてくれたお二人への感謝のメッセージだったのかも知れません。

ちなみに、ローレンス・マレロはアレン通り、後に引越して亡くなった時はインダストリー通りというところに住んでいたそうです。滞在中は時間がなくて調べることができませんでした。帰国後に調べてみ

たところ、トレメ地区のさらに奥、湖とミシシッピ河の中間あたりの場所で、僕たち観光客が散歩がてら訪れるのはちょっと難しそうです。GoogleのStreet Viewで探してみたところ、二つの住所には今もショットガン・ハウス(表からショットガンを撃つと二つの壁を突き抜けて裏庭に弾が貫通するような粗末な木造家屋の意)が建っていました。

ローレンス・マレロ(Lawrence Marrero)のバンジョーについて(原本メモの抄訳)

1968年(昭和43年)12月18日、日本のバンジョー奏者、外山恵子さんとご主人の喜雄さんは、ローレンス・マレロが最後に使っていた最高のバンジョーを彼の未亡人、エロイズ(Eloise)・マレロさんから購入した。彼女はこのときアレン通り1815に住んでいた(彼女の娘さんの1人はすぐ隣の1811に)。

このバンジョーは金メッキされたエピフォン(Epiphone)社製で、11インチ(約28センチ)のヘッドをそれより一回り小さ目の重いリングで裏側から支える構造になっている。

(イラストの上下に製造番号「#6580」、フレットは「19」と明記されている)

珍しい形状のギア付きのペグ(peg)、木と金属で作られた重いボディ、24本のラグ(lug=留め棒)、重いリゾネーター(resonator=反響板)を備えている。それにこのバンジョーは、1950年代初め、カリフォルニアでリチャード・トルバートによって撮影されたローレンスとジョー・ルイスのバンドの写真にも写されているバンジョーである。たぶんそれは、ロサンゼルス市のビバリー・カヴァーンズか、ハリウッドのすぐ東であろう。

末端の先端部分(tailpiece)はなくなっていた。たぶんローレンス夫人が1963年のハリケーンの後、移り住んだ際に失われたのであろう。バンジョーそのものは、高潮などで損害を被ることはなかったが、決して最高の状態とはいえなかった。昨夜(1968年12月18日の夜)、外山夫妻と我々は午前3時までかけて、新しいヘッドやブリッジ、尾部、弦の部分などを付け加え、このバンジョーを磨き上げ、修復しようと努めた。

これまで何人かの人たちがこのバンジョーを買い取りたいと申し出ていたが、誰も手に入れることが出来なかった。

1968年12月19日記す ウィル・ラッセル(William Russell)

(今回は2年前の最初のアーカイブ訪問で見つけたジョージ・ルイスに関する資料をご紹介します)

この思いがけない“歴史の発掘”に外山夫妻も思い出を甦らせ大感動

あの日、マレロー夫人「夫に代わって日本へ連れて行って」…

バンジョーに魅せられた恵子さんとバンジョーにまつわる秘話を全公開！

渡辺研介さんのスクープ！恵子さんのバンジョーにまつわる“歴史的発見”を受けて、さっそく過日、その詳細を外山さん宅でじっくりと恵子さんに語っていただいた。外山さん宅は、まさにニューオリンズジャズの資料に埋もれた“外山喜雄・恵子ハウス”



ミュージアム”。恵子さんはA4のノートに何冊も万年筆でびっしりと、当時の活動を几帳面に書きとめている。恵子さんは“その日”の書き込みを指でたどりながら、時には涙さえも浮かべながら、このインタビューに応えてくれた。

(聞き手:小泉良夫)

——まずは、恵子さんがこれほどまでにバンジョーに心を奪われた馴れ初めは？

「大学を卒業し、結婚後しばらくしてニューオリンズに行こうと決めた頃なんです。来日したジョージ・ルイス・ニューオリンズ・オールスターズの公演(1965年5月)を聴きに行って、その時のバンドのピアニスト、チャーリー・ハミルトンの演奏にすっかり魅せられてしまったのです。ピアノはもちろん素晴らしいものですが、彼はバンジョーも演奏するんです。それがまた凄い！」(最初は、ピアニストがバンジョーも…！？と、いぶかっていたそうだが、この“二刀流”に次第に引き込まれていく。「私もニューオリンズへ行ったら、バンジョーもやろう」と)

「お茶の水の楽器店でフラマス製の安いバンジョーを買ってきたのです。ひたすらレコードを聴いての独習。でも、最初の頃は喜雄さんにいろいろ教えて貰いました。渡米する船の上でも…そう、あの写真(3面)が、そのバンジョーです」

(当時は女性のバンジョー奏者など聞いたこともなく、たぶん恵子さんがダントツの一番乗りだったに違いない)

——それで、ニューオリンズでは、そのバンジョーを？

「初めのうちはそうでした。でも、なんかお鍋みたいなバンジョーで、どうも気に入らなかったのです。音も気に入らない。それでニューオリンズで中古を2本買いました。その1本がジョージ・ゲイノー(bj)の使っていたベガ製ショート・ネックのもの、フラマスを売って中古をもう1本。でも、どれもしっくりこなかったんです。それでまだ、もっといいのがないかって探していたのです」

——いよいよローレンス・マレローのバンジョーに行き着くわけですね。

「ええ、私たちをニューオリンズに呼んでくれたプリザベーションホールの創設者、アラン・ジャッフェ(tuba)が『いいのがあるかもしれないよ』と言って、私たちのアパートの家主さんや私たちが住んでいた下の階のレストラン『カフェ・クリオール』(このパティオで私たちは毎日演奏をして、1日2食食べさせて貰っていました)のオーナー、サニー・



ヴォクレサンといったみなさんが、あちこちに声を掛けてくれていたんです。特にヴォクレサンさんはニューオリンズの名士で、ご親戚にもミュージシャンが沢山いらしたし、とても顔が利いて、あちこちに声を掛けて、探してくれていました」(そんなある日、彼から思いがけない朗報が届けられた)

——ついにマレローのバンジョーが…？

「マレローの奥様、エロイーズさんが彼のエピソード製のバンジョーをまだ持っているって言うんです。誰もがみんな、『ウソだろう！？あれはハリケーンで壊れちゃったんじゃないのか？』って。それですぐに奥さんに電話してくれて確かめたんです」

——間違いなかった？

「あつたんですよ、そのバンジョーが…。その時の電話で、彼が『日本からジャズを勉強に来ている夫妻がいいバンジョーを探しているんです。出来たらそれを譲ってあげていただけませんか』って頼んでくれて、私も電話に出て『譲っていただけたら、とっても嬉しい！』とお願いしました。そうしたら『OK！』って。翌日、奥さんと娘さんが住んでいるお宅へ駆けつけました」

——それが、1968年12月18日、渡辺研介さんが発掘したメモにもあるマレローのバンジョーとの出会いだったんですね。



1981年、当時のセインツのメンバーとレンタカーでロスからアメリカを横断し、ニューオリンズのマレローの未亡人、エロイーズさんの家を訪ねた。前列左から、エロイーズ、お嬢さん、恵子、外山洋一。後列左から中嶋由造、現デキシーキングスのバンジョー奏者、長尾衛(永生元伸)、外山喜雄のみなさん(マレロー一家は当時、引越して、ロンドン・アベニュー2223と2225に母娘が隣り合わせて住んでいた)

「そうなんです。それで出掛ける前に、あのメモを残して下さったビル・ラッセルさんに声を掛けて一緒に行っていたいたんです。彼はニューオリンズジャズの研究者で、もう神様みたいな方。ニューオリンズジャズ・リバイバルを起こした方。それが、不思議なご縁で、私たちは2度も引越したのに、その都度お隣さんになっていました。彼ってもう興奮して、いろいろな写真を引っ張り出してきては、このバンジョーか、あのバンジョーかって大変。そんな写真をいろいろ持ってみんなで出掛けていきました。近所の方が車も貸してくれたのです」

——メモにもあるように、それを持ってすぐにラッセルさん宅へ…。

「思っていたほど壊れてはいなかったのです。バンジョーを手にとると、そのままビル・ラッセルさんの家に直行、さっそく3人でバンジョーの修復にとりかかり

ました。剥がれている所を膠(にかわ)で貼り付け、足りない部品を取り付け、本革を水でなめしてヘッドを張り…。なぜか、それらのパーツをビルは全部持っていました。終わったのは、夜明け近くでした。でも、音を出してみることができたのは、革が乾いてきた3日位たってからでした」

——使ってみてどうでしたか？ 今度こそ…。

「ネックが細く、手の小さい私にはとても弾き易いのです。あれからもう45年も使っていますが、以前に1度オーバーホールをして貰っただけで、状態はむしろだんだんよくなっていくようです。音もどんどん良い音、私の好きな音になっていってくれます。このバンジョー以外は弾く気にならない程、私の愛するバンジョーですが、ただ1つだけ…もう、重くて、重くて…。ボディの木杵、金具など、かなり太く、重い材料を使ってあるので、他のものよりだいぶ重たいのです」

(そりゃあ“お鍋のような”バンジョーとは、大違いでしょう)

——前にもちょっと伺ったんですが、その時のエロイズ夫人の言葉が泣かせますね。

「はい、こうおっしゃっていました。『主人ローレンスは、ジョージ・ルイスのバンドと一緒に日本へずいぶんと行きたがっていたのですが、病気でどうしてもいけなかったんです。そんなローレンスのため、主人に代わってぜひこのバンジョーだけでも日本へ連れて行ってあげてください』って。このバンジョーを欲しがっていた方が、ほかにも沢山いらしたようですが、手放さなかったんでしょうね」(譲り受けた価格は、「思っていたよりもすごく安かったのです」と。当時と今ではレートも価値観もだいぶ違うが、余りにも安いと思ったので“貧乏ジャズ学生”の精一杯の感謝の気持ちを上乗せして譲ってもらったとのこと)

——オハイオ・ユニオン・コンサートのバンジョー！

「まさにニューオリンズジャズ・リバイバルの中心になった歴史的な楽器。あの歴史的な名盤、オハイ

オ・ユニオン・コンサートで‘世界は日の出を待っている’を弾いた楽器だったんです。マレローは、ルイスが一番信頼していたバンジョー奏者なんです。不思議ですよええ。

何でこのバンジョーが私のところに来て、45年も…」

——それほどのバンジョーですから、周囲でいろいろと話題に上ったのでは？

「もちろん、そのビッグ・ニュースは、たちまちニューオリンズのジャズ仲間の間に広がりました。バリー・マーチン(ds)のバンドに誘われてアメリカ国内を半年、ヨーロッパを半年回った(1971年)のですが、その時のピアニストがジョージ・ルイスのバンドでマレローとも共演していたアルトン・パーネルでした。とても勉強になりましたし、彼は、ローレンスと一緒に演奏して

いるようだと行ってくれたし、ずいぶんと評判になっていました」

——ピアノの方はどうなったのですか？

「私たちのアパートには、もちろんピアノなんてありませんでした。最初の頃は、とにかくバンジョーに専念しました。でも、

チャーリー・ハミルトンを聴くと、あんな風にピアノも弾けたら…と。彼は当時、プリザベーションホールのキッド・トーマス(tp)のバンドのピアニストでした。いつも彼の弾くピアノの横に席を陣取ってピアノを聴いていました。プリザベーションホールの鍵も預かっていたので、昼間とか真夜中、そこでピアノの練習もできました」

(演奏の仕事といってもそこにピアノがあるとは限らないので、ピアニストがバンジョーを弾く“二刀流の達人”も多かったという。恵子さんも、そんな達人の仲間入りを目指す)

——そうそう、喜雄さんから送られてきた上の写真、恵子さんがプリザベーションホールで、ジョージ・ルイスと共演しているものがありました、あれは？

「あ、あれはもっと前の写真です。バンジョーも違うし…。私は当時、プリザベーションホールのバンドにsit in(飛び入りしてバンドと一緒に演奏させて貰うこと)することを特別に許されていました。若い(!)女の子(?!)だった私は、ちょっと得をさせていただきました。キッド・トーマスやパンチ・ミラー(tp,vo)のバンドによくsit inしましたが、ジョージ・ルイスとも時々一緒に演奏できました。これは私の真剣勝負、最高の勉強になりました。ニューオリンズジャズ、源流のジャズのリズム感、スウィング感を体で覚えたいと思っていました」

——ジョージ・ルイスとの最後の共演は、彼が亡くなる直前だった？

「1968年当時、ジョージ・ルイスは体調を崩しては入退院を繰り返していました。私たちがマナサスジャズ祭のため、10日ほどニューオリンズから離れて帰ってきた夜、プリザベーションホールのキッド・トーマスのバンドにしばらくぶりにジョージ・ルイスが出演していました。12月13日のことでした。その夜はバンジョー奏者がいなくて、私が呼ばれたのです。これが彼の最後の演奏になってしまいました。そして、この5日後の12月18日、私は運命のマレローのバンジョーを手に入れました。その2週間後の12月31日、ジョージ・ルイスは天国に逝ってしまいました」

(このときの最後の曲は『レッド・ウィング』だったという)

——彼は、何か言っていましたか？

「彼は私に『良いバンジョーを弾くね。良いリズムだ』よく言ってくれていました。この言葉は私の心の支えです」(その当時の自らの書き込みを読みながら涙ぐむ恵子さん。「思い出すとホント涙が出てきてしまうんです」と)

ジョージ・ルイスの通夜の日、恵子さんはジョージ・ルイスの一番のリズムの片腕だったマレローのバンジョーを携え、式場に向かった。そこで恵子さんはマレローに代わってルイスの名曲『バーガンディー・ストリート・ブルース』をトミー・サンクソンのクラリネットとともに演奏した。



ビル・ラッセルさん宅で彼の資料整理を手伝う喜雄さん



ジョージ・ルイス(中央)のバンドでバンジョーを弾くマレロー(左)。これが今、恵子さんの手に

**ご寄付と嬉しいお手紙
ありがとうございます**

◆荒井正雄様

京子様 (西東京市、賛助会員) 30,000 円

◆鈴木鐵雄様 (松戸市、一般会員) 10,000 円

◆森田育弘様 (東京・北区、一般会員) 10,000 円

◆内藤壽昭様 (世田谷区、賛助会員) 30,000 円

◆増田満俊様 (横浜市)から楽器4点

・ソプラノサクソ (河合、B&S)

= '80年代頃の製造、ハードケース有、マウスピース無

・ソプラノサクソ (ジュピター)

= '90年代頃の製造、ハードケース有、マウスピース無

・アルトサクソ (トレバージェイムス)

= 平成18年頃の製造、ハードケース有、マウスピース有

・テナーサクソ

(ジュピター)

= '90年代頃の製造、ハードケース有、マウスピース無

(古い楽器で、高価なものではありませんが、メンテナンスすれば十分使えると思います)



増田様からのこれら

の楽器は、グローバル管楽器技術学院(東京・新宿区)で今回も無償修理、調整していただきました。「私たちがやりました！」と学院生(写真右上)。右端は同学院事務長の植田正之さん。



**ついに米への寄贈楽器は 800 点超！
日本通運の支援受けニューオリンズへ**

皆さまから寄贈していただいたこれら楽器、計20点を今回も日本通運のご支援を受けて、このほど外山さん宅からニューオリンズに向け発送しました(写真上の下段)。皆さま、有難うございました。これらの楽器は今夏の「サッチモノ

旅」で、外山夫妻、ツアー参加者のみなさんと子ども地元の高校を訪問、プレゼントする予定です。これで寄贈楽器は総数800点を超えました。改めて厚く御礼！！

**オバマ大統領夫妻の前で熱演した
トロンボーン・ショーティーにも寄贈**



寄贈にまつわるこんな写真も出てきました。前号でも、ご紹介したホワイトハウス特別出演のトロンボーン・ショーティー。この左の写真は、彼が中学3年の時、WJF から寄贈されたトロンボーンにご満悦のナップ。ケースには、はっきりと WJF のロゴマークが認められます。

募集中!

♪ジャズを愛する皆様
どうか会員になって下さい!!
また皆様のお知り合いの方々に
ぜひ、WJFへのご入会をお勧め下さい

=WJF年会費=

一般会員(General Membership)	¥6,000
学生会員(Student Membership)	¥3,000
賛助会員(Friends of Louis Armstrong)	¥12,000

■会費のお振込み先■

郵便振替 00110-4-415986

ワンダフルワールド・J・F

銀行振込 三菱東京UFJ銀行浦安駅前支店

普通：5175119“ワンダフルワールド”

お問い合わせは：WJF事務局

TEL: 047-351-4464

Fax : 047-355-1004

Email:saints@js9.so-net.ne.jp

日本ルイ・アームストロング協会HP

検索エンジン:Yahoo,Googleで

ルイ・アームストロング

ユネスコ国際ジャズ・デーの4月30日に開催された外山夫妻の国家戦略大臣表彰記念コンサートは、日本のジャズ界の大先輩、原信夫さん、世界の日野皓正さん、ジャズ評論家の瀬川昌久さんや米大使館の文化交流担当官、リチャード・メイさんが駆けつけ、お祝いと喜びにあふれたステージでした。当日のステージの紙上再現をお楽しみ下さい。▼WJFスタッフの渡辺研介さんが、4月末にニューオリンズ、チヌーレン大学のジャズ資料館で発掘したバンジョー奏者、ローレンス・マレローの資料は、外山恵子さん愛用のバンジョーにまつわる秘話でした。この資料を書いたビル・ラッセルは、AMレコードのディレクターで、外山夫妻の紹介で私もニューオリンズの彼の家を訪問したことがあります。▼実は、私も大学時代からのバンジョー弾きで楽器はKay。恵子さんのバンジョーを年に1回弾かせていただく、その夜はCDでローレンス・マレローを聴いて、興奮して眠れません。▼研介さんの原稿は興奮促進剤です。(山)

編集長から